HOKKAIDO MUSEUM OF MODERN ART

THE COLLECTION GALLERY

これくしょん・ぎゃらりい

2009年 7 月11日(土) ▶ 2009年10月18日(日)

帝展の若き道産子

上野山清貢・加藤顕清・山口蓬春

Three Distinguished Pre-war Hokkaido Artists from the Teiten Exhibition: Kiyotsugu Uenoyama, Kensei Kato and Hoshun Yamaguchi

「帝展の若き道産子 上野山清貢・加藤顕清・山口蓬春」展を開催します。

上野山清貢、加藤顕清、山口蓬春の三人は、いずれも北海道ゆかりの美術家で、ともに戦前から戦後にかけて中央で活躍しました。とくに帝展（帝国美術院展）では昭和初期から三人がほぼ同時に連続して特選となり、大いに注目を浴びました。奔放で力強いタッチと鮮烈な色彩で、南洋や中国に取材した油彩を手がけた上野山清貢。西洋のアカデミズムを手本としながら堅実で端正な彫刻を生み出すようになった加藤顕清。大和絵など古典を研究し、伝統とモダンな感覚を融合させようとした山口蓬春。三人はそれぞれの分野で帝展を舞台に個性を築きあげていったのです。かれらの活躍は、戦前から北海道の美術界に大きな刺戟を与えました。戦前に在京の有力美術家によって設立され、かれらも参加した北海道美術家連盟もその一つです。おりしも当時、北海道の美術界は道展（北海道美術協会）が発足するなどして盛り上がりを見せていた時期でした。こうした情況の中で、三人はそれぞれに北海道との関係を結びましたが、とくに加藤顕清は北海道工業試験場に招かれ、工芸の指導にもあたるなど、本道工芸の発展にも力を注ぎました。本展では三人の道産子作家の初期作品を中心にして、帝展で培ったそれぞれの個性を展覧するとともに、北海道美術界との交流も紹介します。

No.	作家名	作品名	制作年	技法・材質	帝展出品暦
1	加藤　顕清	人間	1951（昭和26）	ブロンズ	
2	加藤　顕清	トルソ・女	1955（昭和30）	ブロンズ	
3	上野山　清貢	自画像	1927（昭和２）	油彩・キャンバス	
4	上野山　清貢	子供と馬のいる風景	1925（大正14）	油彩・キャンバス	第６回帝展
5	上野山　清貢	とかげを弄び夢見る島の乙女	1924（大正13）	油彩・キャンバス	第５回帝展
6	上野山　清貢	ある夜	1928（昭和３）	油彩・キャンバス	
7	上野山　清貢	室内	1928（昭和３）	油彩・キャンバス	第９回帝展
8	上野山　清貢	航海	1930（昭和５）	油彩・キャンバス	第11回帝展
9	上野山　清貢	女紅場風景	1933（昭和８）	油彩・キャンバス	第14回帝展
10	上野山　清貢	暮色	1932（昭和７）	油彩・キャンバス	第13回帝展

11　上野山　清貢	ある夏の日に(梅夫人像)	1949(昭和24)	油彩・キャンバス
12　上野山　清貢	少女(習作)	1956(昭和31)	油彩・キャンバス
13　山口　蓬春	浄境閑寂	1926(大正15)	絹本彩色・軸
14　山口　蓬春	帰漁	1928(昭和３)	紙本彩色・軸
15　加藤　顕清	コタンのメノコ(愛情)	1962(昭和37)	ブロンズ
16　加藤　顕清	コタンのアイヌ	1941(昭和16)	ブロンズ
17　加藤　顕清	ロシア人の首	1965(昭和40)	ブロンズ
18　山口　蓬春	春野	1935(昭和10)	絹本彩色・軸
19　山口　蓬春	暖冬	1933(昭和８)	紙本彩色・屏風(二曲一双)
20　山口　蓬春	松原図	1932(昭和７)	紙本彩色・屏風(二曲一双)
21　山口　蓬春	冬菜	1955(昭和30)	紙本彩色
22　山口　蓬春	向日葵	1955(昭和30)	紙本彩色
23　加藤　顕清	盲目のアコーディオン奏き	1960(昭和35)	ブロンズ
資料1　加藤　顕清 北海道工業試験場	人物置物(西中尉 障碍飛)	1935(昭和10)年頃	陶磁
資料2　加藤　顕清 北海道工業試験場	スキー・ジャンプ	1935(昭和10)年頃	陶磁
資料3　加藤　顕清 北海道工業試験場	人物置物(スキー)	1935(昭和10)年頃	陶磁

＊№1,2,15～17,23は中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館蔵。資料1～3は北海道立工業試験場蔵。